

# 門信徒だより

2020 5月 上旬

和上 発

私達は現在の人生を送り色々な創造を画きながらの日暮ですが、心を沈めて思いめぐらせてみれば全てが因果の法則に順っていることが知らされるのです。

何の因<sup>たね</sup>もなく何の縁<sup>つながり</sup>もなく突然何かが現れると云うことが無いことなのです。

或<sup>あ</sup>る高僧<sup>こうそう</sup>が私達の智能程度<sup>ちやうど</sup>が低い<sup>かり</sup>ために仮に立たれて人生誕生の原因を訪ねた時に全生命は必ず過去に経験した人生を誕生のエネルギーとして、現象界に四生<sup>ししやう</sup>（胎生<sup>たいしやう</sup>・卵生<sup>らんしやう</sup>・湿生<sup>しっしやう</sup>・化生<sup>けしやう</sup>）を似て誕生するのですが

幾重にも重なる経験人生は強い影響（五欲）を表とし誕生する為に両親を送ぶのですが、

その時の我ら自我意識は、我らの最も善<sup>よ</sup>しと決めたと人を親とし、盲目的執念を起し、そのエネルギーは幾億の競争<sup>きやうそう</sup>相手の中、優勝者として始めて誕生動機にて両現とするのでした。

私達人間社会にも生活苦か人間関係か等によって現在の人生<sup>いと</sup>を厭って、再びこの人生を得たくない<sup>い</sup>と決定し、鳥や獣<sup>けもの</sup>などの自由な姿を見てその活<sup>い</sup>き方を願うことが重

なってきましたと、私達の意識の奥（魂）にその因縁が蓄積されてきて遂に、その世界に誕生したいとの完行がなされ先程の四生の型にて現象するのです。

同じ人間社会でありまして自我意識の程度（理性心を重くするか本能心を重くするか）で親を選んできたのですから物心ついて他人と自分を比較する時、現に責任を転嫁するなど愚の骨頂とも云えるはずでず。

こうしてみますと自己の事でありながら知能低きことを棚に上げて偶然を願ひ（因果揆無）、因果の道理を認めながらも”どうもならん”と人生に落胆をする人も多いと思うのですが、誕生の仕方を知った今、人生経験の果報の善し悪しを離れて、再びこのような過酷な運命にもて遊ばされずに、仏の本願力に乗じて一気に向上進歩して堂々と歩める人生形成はいかがでしょうか。

東洋で果報の善悪を最初に教えたのは道德の孔子聖人ですが、「道德は修鍊克己の努力生活であり、道に対する服従である」が基本でした。

平生には己の乱れを繕って美しく見せようとの努力でしょうが、限られた智能の中で理想という未来に走っても、現実という現在にへばりつく習性は変わらないのですから、すべてが虚偽・輪転・無窮となって結ばれて解

けないのですから永久に心の矛盾<sup>むじゆん</sup>の苦悩<sup>や</sup>は止むことができないのでした。

我ら弥陀法は、理想にも活かせよう、そして現実にももの大理想<sup>かか</sup>を掲げられ、我らの為に五劫・永劫の修行を重ね、<sup>つい</sup>遂にその大理想は弥陀の本願力として完成され、いつの時にもこれを実践しようとされる大哲学者、大宗教者<sup>どうじょうえん</sup>あれば増上縁としてこれを使って貰おうとされた内容が完成されました。

大經流通分<sup>るずうぶん</sup>（經のしめくくり）に

「<sup>とうらい</sup>当来ノ世ニ<sup>きょうどうめつじん</sup>經道滅尽スルコトアラン。ワレ<sup>じひあいみん</sup>慈悲哀愍ヲ以テ、ヒトリ此ノ經ヲ留メテ止住<sup>しじゅう</sup>スルコト百歳セン。其レ衆生アリテ、斯ノ經ニ<sup>こ</sup>値<sup>あ</sup>フ者ハ<sup>こころ</sup>意ノ所願ニ随ヒテ皆得度スベシ」

の文があって、弥陀の本願を保持して大無量寿經を經体とする真宗に会う人は皆救われる。と説かれました。

「特留斯經止住百歳」とは大無量寿經を聖人の心に止めて、聖人の智恵の光として輝くから、真実之教・浄土真宗<sup>がんしんしょうごん</sup>とうふ願心莊嚴が開らかれ、法蔵菩薩の御苦勞一切が浄土の出張所と名づく真宗より開出され、この如来の經（イトナミ）に会う者は現実社会に有りながら浄土の教えを受けることができる仕掛けが説かれてあ

ります。

それですから現実の私達は、本宗聖人の宗教心に触れてこそ、この世界が我物となって超日月の進歩向上が計れるのです。

前回の「門信徒だより」に宿善しゆくぜんのことがありました。

この言葉は宿世しゆくせ（くり返された人生経験）に仏しんごんに親近する為の善根功徳を、どれだけ宿やどしてきたかの意味になります。

そしてこの宿住因縁しゆくじゆういんねんの力が、仏在世ざいせの時に我身を誕生させ、その本願力に相応させようと働かれるのでした。

この心を”真実の宗教心の芽生え”と云うのです。

一方、我ら能力を離れた諸仏しよぶつ、善神方ぜんじんがたの本願も何とかして我ら人間性に対して向上進歩を願って止まぬ誠心まごころを重ねてきた経緯がありまして、我ら衆生の為に無条件でこれを為さしめる方法は持なかった為に、”棚の上のボタ餅”でしかなく夜の星影ほしかげのごとく手の届かぬ、無きに等しい現状がありました。

聖人の仰せに「我らがサトリを開らく」とは何かとの質問じとうに自答されて、

諸仏方が我らに積み重ねられてきた誠心まごころの善の功徳を

我物とすることと、鬼、悪魔の如き自性を美しき<sup>とう</sup>尊と  
き佛とす。

の二大特長があるとの教えを伝えられました。

そしてこの大理想実現が真宗では因果ニ他力と明して、  
本願他力ほんがんとりき いんは因他力たりきほんがん、他力本願かじょうは光明他力で弥陀の果上他  
力と教え、総序巻そうじょかんに難思なんしの弘誓ぐぜいと無碍むげの光明釈くわうみやうしやくで示され  
たのでした。

また、弥陀ま広大の功德は二大他力より他なく、難思の弘  
誓ほうぞうは法蔵がんとりきの願心いん莊嚴えいぜんで十方えいせへ恵施えせされし四十八の願心  
で、凡夫ぼんぶに代わって願行がんぎょうを励まして十八願しんぎょうの信樂成就しんぎょうじょうじゆを  
与え下ぎょうじゃさる行者ぞうじょうえんの為いんの増上縁いんを因他力と云ひ、  
無碍むげの光明くわうみやうは本願成就ほんがんじょうじゆされた如来じざいじんりきの自在神力じざいじんりきで情的迷情  
と智的迷情むみやうあんの無明闇むみやうあんを破やぶって因他力の六字名号ろくじなごうを刻み込  
まん誓むげわれて現在げんざいしたまふ果上他力かじょうとも聖人せいじんは教え下  
さりしました。

この因果ニ他力にて宿善（真実の宗教心）はひらかれ、こ  
の上に「弥陀ヲタノミ奉ル南無の仏心」が刻きざまれて  
我らに他力信心として働かれる作用が自然にひらかれて  
くるのでしたから、何から何まで仏道（仏となる道）を歩  
ませて下くださる純粹宗教心・仏道の菩提心を育て上げて下  
さっは「弥陀成仏ノコノカタハ」でありました。



「この方」なのであります。

私達の手紙にも何々方<sup>かた</sup>、何々と書きますが、聖人のお手許を強調されて居る事が知らされます。

又、六字釈<sup>ろくじしゃく</sup>の上から申せば、阿弥陀の大理性の法則は純粹大理性であって、おさめ・たすけ・すくうの理仏<sup>りぶつ</sup>が機縁<sup>きえん</sup>熟<sup>しゅじょう</sup>していよいよ衆生に対する時、

南無の佛心と現われて（事仏<sup>ぶつじ</sup>）働られるのですから、

この六字の上からも「この方」であり、

尊号銘文<sup>そんごうめいもん</sup>を通してみる時、如来聖人の大宗教心は「帰命<sup>きみょう</sup>のころ」ですから「一心ハ帰命心ナリ、帰命ハ南無ナリ」からしても「この方」なのであります。

私は愚慮ながら、この浄土和讃の初讃が心に残り、後にこの初談から三首目までは涅槃の三徳と云われて無上涅槃を開かれた我ら如来聖人のお世界であることを聞かされ、大いに感激と自信が深められたことを懐かしく思出されるのでした。

一宗を興行下さった聖人の悟られた「サトリ」が私達の開らくべきサトリなのですから、

他の佛・他の菩薩のサトリではありませんから、

聖人御一流<sup>あんじん</sup>のご安心こそ、我ら安心の体なのであります。

聖人ご自身の宗教心に同調するしか無いではありませんか。

( 完 )



不 許 複 製

所有者 弘願真宗総本山聖玄寺法燈局

住所 福井県福井市羽水 1-303